

「遠隔(リモート)授業への取り組み」

アメリカ ユタ日本語補習校 6年生担任／小学部主事 笠井 縁

《学校の規模など》

設立11年目。現生徒数は110人前後。

幼稚部3クラス（年少、年中、年長）と小学部6クラス、
中学部3クラスの12クラス。

2月26日～3月第1週

- 日本出張から戻られた直後の保護者がボランティア・アシスタントに入る予定だったが、日本がこの時点でレベル2（当該国から渡航した場合は注意）だった為、運営委員会で協議し該当する状況の保護者とその同居家族には14日間の自宅待機を要請。
- 生徒へは担任より家庭学習の指示を出す。
- 結果として数家族がこの条件に当てはまり、自宅学習に協力してもらう。

3月の第2週

- 14日に卒業式を控える中でユタ州内の緊張も高まり、卒園・卒業式（修了式）の開催方法（規模縮小など）を協議し始める。
3月13日に州内の公立校に2週間の休校指示が知事より発令。
すぐに14日の休校を一斉に連絡。
- 同時に理事、運営では4月からの授業再開ができない場合を想定し、オンライン授業の検討を始める。
運営、理事、教務の各部より任意参加のオンライン授業検討会がビデオ会議にて始まる。
教務内ではそれを受け、教員の状況、オンライン授業またはその他の代替え案への意欲、意見を集める。

3月 第3週

- 任意参加のビデオ会議にてオンライン授業検討会を続ける。
中学部は3時間のオンライン授業が可能だという方向。
小学部も高学年は可能だが、低学年が懸念されるので、
小学部ではオンラインと家庭学習のハイブリッドを検討。
- 保護者へはアンケートを実施。ただし授業形態の希望ではなく、
オンライン授業をする としたら家庭内で端末は足りているか、
ネット状況はどうか等、技術面の情報収集のみ。
- 事務に新年度の教科書・教材の大半が届いたので、教材配布会の
実施を検討、計画。

3月23日

- 校長より新学期は4月4日より始まるが4月末までは遠隔授業を行う事と3月28日に使用校舎の駐車場にて社会的距離を保ちながら教材配布会に行く旨を一斉メールにて連絡。
この数日で集会人数などの規制が厳しくなったので、随時配布会の実施方法を検討、変更し保護者へ連絡。
- 教員は1学期の学習計画をオンライン授業を想定して調整し、配布会で配る資料の作成。同時進行でビデオ会議の操作方法を必要に応じてトレーニング。
- この段階で幼稚部から中学部まで全クラスオンライン授業をすることが決定したが、詳しい時間や内容は未定。

3月26日

- 新年度の担任より自己紹介と教材配布会や新年度の授業についての連絡メール

3月28日

- 教材配布会の実施（屋外にて社会的距離を保ち、感染予防をしながら）

3月 第4～5週

- 教員は引き続きビデオ会議のトレーニングと授業内容の検討やスケジュール調整。中学部は3時間ほとんどオンライン授業、小学部は生徒の集中力等を考え、オンライン授業と家庭学習（プリントなどで自習）の併用、幼稚部は休憩をはさみながら90分ほどのオンライン授業の方向。
- 兄弟が多い家庭が同時にログインしても問題が起きないか、端末が足りているか、また低学年がどこまでオンライン授業でやれるかを確認、議論。幼稚部の内容も検討を続ける。
- ビデオ会議アプリ(zoom)を使用し、クラスごとに顔合わせ、保護者懇談会を実施。(zoomの練習も兼ねて)

3月30日

- 教務主任より保護者へ4月4日からの授業の詳細を連絡。
この段階では教務と保護者の間で遠隔授業への理解に差があったため。
また4月4日に一度やってみないとわからない面も多く、やりながら調整していくことも伝える。

4月4日より遠隔授業を実施

4月末に1学期末(5月30日)までリモート授業を続ける決定、保護者へ連絡

- 当初の年間計画通りの日程で、1学期終了の5月30日まで計9回のリモート授業を行った。
- オンライン授業時間は各クラス徐々に延長(兄弟が複数の端末で同時にログインしても大きな問題は起きなかった事、教員もzoomの操作に慣れてきた事、またそれにより通常授業とほぼ同じ進度で1学期の学習内容を終わらせることが可能だと見通しが立ち、その内容をカバーする為。)
どの程度時間を伸ばすかは基本的に各担任の判断によるが、毎週土曜の授業後にミーティングをして、他学年の状況や情報を共有しながら調整を続けた。

《授業以外の取り組み》

◎週1回のバーチャル休み時間（バーチャル・プレイデート）

- 呼び名は学年によって変わるが、授業以外に生徒同士がつながれる場をzoom授業と同じリンクを使って提供。
目的は学習以外に生徒同士が交流し、横のつながりを感じられる事。
- 保護者が当番制で活動をリードしたり（主に低学年）、生徒同士が自由におしゃべりやzoomでできる遊び（しりとりや絵を描いて見せあってあてっこする等）を考えながら参加するなど（主に高学年）、クラスによって内容は違う。
- 曜日と時間を決めて、毎週。自由参加。

◎バーチャル終業式

- 小中学部合同で5月30日の1学期最終日には、バーチャル終業式に挑戦。
1世帯1端末で1つのzoom 教室にログインし、校長にお話をしてもらう
…予定だったが、生徒はほぼ全員ログインできたものの校長自宅のネット環境が安定せず上手くつながれなかった。
ただ50世帯ほどの全生徒と保護者が一斉に集まって、リモート授業をみんなでがんばったね！やってよかったね！と言って1学期を締めくくることはできたと思う。（幼稚部は6月20日までリモート授業をするので、その日にバーチャル終業式をする予定）

《教員の立場から、リモート授業をしてみたの所感》

- 個人的にはここまで新型コロナウイルスの影響が長引くとは思っていなくて、初めに運営よりリモート授業の話が上がった時にはあまり乗り気ではありませんでした。数週間で休校が終わるのであれば、家庭学習の指示を出して各家庭で学習を進めてもらうのがいいだろうと。しかし運営の予見と判断は正しく、結果として「やってよかった！」というのが今の実感です。
- 保護者からは当初戸惑いの声も上がりました。しかし教務と運営で何度も話し合いを重ねながら、授業料は変更しないまま自習時間は保護者のサポートも必須だと協力も仰ぎ、とにかく不完全ではあっても子どもたちの学習をやれる範囲でつないでいきましょう！と言い続け、5月に入る頃には大半の大人が同じ方向を向けたような気がします。

以下に、オンライン授業を組み込みながらリモート授業してみて良かった点と、同時に課題などを挙げます。（私の担当が小学部なので、小学部の授業が中心。担当は2年生と6年生）

- 授業準備は非常に大変でした。オンライン用に授業を組み立て直す必要があるので、普段の何倍もかかりました。慣れて来たら多少準備時間は短くはなりますが、やる事はいっぱいあります。
板書の準備（拡大図など）がない代わりに、自習時間用に学習内容に関連した動画を探したり、自習用のプリントを一から自作したり。
プリント作りでは、指示文や問いが生徒（低学年では保護者）に簡潔且つ正確に伝わるように言葉を吟味したり、わかりやすいレイアウトを考える必要があります。
また動画を探すにも、幸い日本の休校サポートとして々な動画がありますが、玉石混合なので探して選ぶには時間がかかります。

- オンライン授業そのものでは、教員の技量が今まで以上に試されました。
興味を引く授業の構築、生徒との関係を築いていく人間力などです。
また自宅なので、低学年ではつまらなくなったら画面から消えてしまう場合もあり得ます。言ってしまうえば毎週が授業参観であり、研究授業です。
(授業の録画を教員間で共有できたのはオンラインだからできた事です。)
- また神経をすり減らされたのは、やはり保護者対応です。
リモート授業と聞いて思い浮かべるものは個人により千差万別で
「思っていたのと違う」と声をあげる保護者も初めは少なくありませんでした。
極端に言えば、生徒の年齢に関わらずいつもの授業時間(9時から12時の3時間)ずっとオンラインで、パソコンの前に座らせておけばいい、また座っていられる、担任が何とかしてくれる、つまり保護者は何もしなくてもよい、と思われる保護者もいたようです。

- これは、生徒の集中力には限度がある事、長い間オンラインでつながっているからと言って内容が深まったり、学習効果が高いとは一概には言えない事などを繰り返し説明するより他はありませんでした。ただ現地校もリモート学習をしていたので、保護者のストレスもあるだろう、続けて行けばわかってもらえると教員同士で励まし合い、リモート授業の改善を続ける内にそういう極端な意見はなくなっていました。
- こういう意見は少数派で、大半の保護者はどんな形でも続けられることに感謝いただき、リモート授業の形が出来上がっていくのを辛抱強く見守っていただいたと感じています。
また平日のバーチャル休み時間の見守り当番や、1学期末で引っ越す生徒へのメッセージ動画の声掛け、編集など心強いご協力をたくさんいただきました。
「先生も大変でしょうから、できる事はやります！」と言ってくれる方も多かったです。

- リモート授業は保護者の理解と協力がなければできません。この2カ月、保護者、運営（理事、事務）、教務が今まで以上にコミュニケーションを図り、お互いの誤解や見解の相違を紐解きながら、子どもたちの学習を途切れさせない事、また補習校が教科学習だけではなく先生やクラスの友だちとのつながりの場であることを再確認しながら何とか乗り越えました。

- オンライン授業の可能性（今後も必要に迫られ続けなくてはならないかもしれませんが）を実感した事も確かです。しかしやはり教室という、生徒と同じ空間でする授業とは決定的に違うという個人的な結論にも到達しました。

生徒達とつながることはできても、引っ張り上げていく事はできないというのが実感です。保護者の協力は必須ですが、親は教えるプロではありません。本校は教員免許を持っていない教員がほとんどですが、非常に熱心でプロ意識の高い方ばかりです。そういう教員の視点から感じたのは、親は自分の子どもをどこまで引っ張ってあげたらいいのか、どんな言葉をかけてあげたらいいのか、どこで一息つかせたらいいのかというような客観的な判断をするのは難しいとも感じました。

教師であれば、積極的に発言しない生徒でも聞いて考えているのかなとか、答えは間違っているけど考え方は合っているとか、クラス全員の学びにつながるいい間違いを全体での話し合いに発展させるとか、そういう視点がありますが、保護者は「自分の子どもがどれだけ正しい答えを言って（書いて）いるか」だけを見てしまう傾向が強いとも感じました。

- 特に高学年では、読み書きの基本技能以上に生徒につけてあげたい力は、テーマに沿って話し合い、お互いの意見を聞きながら自分の考えも深めるという事なのですが、オンライン授業でこれは難しいです。

教員から生徒への知識や技能の伝達という範囲ではオンライン授業でもやれる事はたくさんあります。しかし協働という新学習指導要領の中で求められている力を、オンラインまたはリモート授業で生徒につけてあげる明確な方法は私には見えていません。

学習塾と学校の違いはそこだと思うのです。塾講師の動画や参考書を使って自分で学べる力や気持ちを家庭で（または自発的に？）育めない生徒にも、学ぶ楽しさを知って欲しいというのが教師の願いだと思っていて、それはリモートではある程度の段階までは可能だが、限界があると感じました。

正答がある問いに、すでに確立された方法で辿り着く方法はリモートでも教えられます。しかしそれは学びの楽しさのほんの一部だと思うのです。

- 春に撮るクラス写真を、今年は zoom 画面のスクリーンショットで撮りました。これもまた忘れられない記念になると思います。

私たち教員は、夏休み明けもリモート授業を継続すると言われても対応できる基本的な技能は身につけ、卒組みは手に入れました。

それでもやはり、なるべく早く普通の学校生活の再開を願って止みません。

子どもたちには大人が右往左往して補習校の授業を続けたこのドタバタ劇を覚えていて、未知のものに面しても「なんとなかる！」と思える楽観性やそれに付随する努力と協力、苦難から何かを学び取るという前向きな姿勢が伝わってくれたらいいなあと言うのが、ささやかな希望でもあります。